



知事コラム

佐竹敬久のさあ、やるど！

## 多様性の時代を考える

今回は、今社会問題化している、いわゆる「LGBT」に代表される「人間の多様性」について、いささか思うことを述べることにします。

社会的に微妙な題材ですので、「知事としてどうかな？」という意見もあることを承知で、あえて問題提起したいと思います。

まず、ある国会議員が「LGBT」について自分なりの考えを語った結果、大きな社会問題となり、それに関わった雑誌が休刊を余儀なくされました。

「LGBT」とは専門的に解説すると、

- ・ Lesbian (レズビアン) 身体と心の性別は女性で、性的指向も女性である人
- ・ Gay (ゲイ) 身体と心の性別は男性で、性的指向も男性である人
- ・ Bisexual (バイセクシャル) 身体と心の性別を問わず、性的指向が両性である人
- ・ Transgender (トランスジェンダー) 身体の性別と心の性別が一致しない人

以上の四つの頭文字をつないだ言葉で、いわゆる性的マイノリティの方を指します。

近年、世界的にこのような性的マイノリティの方の権利を尊重すべきという動きや、生物学的に別に特殊な人ではなく、当然に人間として平等な存在であり差別すべきではないとする考え方が広まってきています。

しかし過去において、特にナチスドイツ時代には、犯罪人扱いされ強制収容所に収監されたことや、国によっては一般社会との接触を許されない扱いをされたりしました。

我が国においても偏見に満ちた扱いをされ、そのことを隠しての生活を余儀なくされたこともあり、最近では理解が少しずつ進んでいるものの、偏見は未だに存在しています。

しかし、少し頭を整理してみると、何らおかしいことではないということが分かります。

自然科学的に考えると、LGBTの方々は、生まれた後に自分の意思や考えでそうなるうとした訳ではなく、もともと持って生まれた性格のひとつなのです。

確かに、人の体格や性格は生まれた後に形作られる部分も一部あるものの、多くは生まれつきのもので、身長が低い高いも人それぞれですし、顔かたちも性格も誰もが違います。

人と違うことが悪いことでしょうか、自分の責任でそうなったものではありません。

生まれつきのもものは自分の責任ではなく、そこを考えると「LGBT」の方をおかしいとする考えが、いかに生物学的常識を無視しているということが理解できるはずです。

果たして私ども秋田県はどうでしょう。私の感覚では「LGBT」に限らず、多くの面で「多様性」への寛容さがいささか足りないように感じます。

多様性を認めない閉鎖的な思考の社会は発展しないことは心に留めておくべきでしょう。